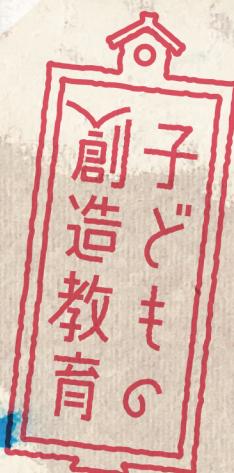




連載企画

神戸ぐらしはじめました。

○○さんの神戸めし：小畦雅史さん
世界のデザイン都市ガイド「カウナス」



子どもたちの学びの フィールドはどこ？

学びの場は学校だけではありません。子どもたちの内なる興味関心は思いがけないところから開花し、クリエイティブな視点や思考が生まれていくのです。今号では、今の子どもたちや、これからの人たちに寄り添う大人の頭の中をのぞいてみることで、「創造教育」の可能性に迫ります。

英語が好きになって、小5から英語塾へ。小6で見た映画『ボヘミアン・ラプソディ』にハマって、クイーンの歌詞の翻訳をしたり、プリティッシュロックへの興味も持ちはじめた。今のところ、将来はイギリスの大学で心理学を学びたいという。

シェフの娘（中学2年生）

長女は、小さな頃は建築現場にもよく連れていったが、今はデザイナーになりたいという。以前はファッションに興味を持って、雑誌を見ながら服のイラストを描いたり、コーディネートを考えたりしていた。長男は、所属するボイスカウトで釣りを教わって夢中に。図書館で釣りに関する本を借りて、手製の釣りガイドを2冊制作した。

建築家Aの長女（中学2年生）
長男（小学3年生）

全員に共通してるのはゲーム「フォートナイト」。4歳の娘も勝手に覚えて遊ぶようになった。長女は手を動かすのが好きで、YouTubeを参照しながらマシンなどを使ってマスクやポーチをつくっている。

宮大工の長男（中学1年生）
長女（小学4年生）、次女（4歳）

いま、子どもは
どんなことに
関心がありますか？

ぬり絵が好き。一度、コピックを使ったぬり絵動画を見て、やりはじめたが、あっという間にインクがなくなってしまったので、色鉛筆を使わせている。

建築家Cの息子（小学2年生）

図鑑が好きで、「恐竜」「危険生物」「動物」「昆虫」をよく読んでいる。ゴジラも好き。

劇場ディレクターの息子（4歳）

ステイホームの時期から「マイクラフト」で遊びまくり、自分の家やまちをつくり、「マーメイドマンション」を建てた。ゲームの知識はYouTubeのゲーム実況で学んでいる。

建築家Bの娘（5歳）

熱心に新体操をやっていて、日々、練習して、前までできなかったことができるようになるのが面白いみたい。なぜか消しゴムを集めていて、30個ほどは持っている。

美術作家の娘（9歳）

野口英世やキュリー夫人といった王道の伝記をよく読んでいる。お気に入りはガンジー。ダンボールでiPadやMacBookをつくって、親の仕事をマネしている。

デザイナーの娘（小学2年生）

友達の中で流行っているカードゲームの「デュエル・マスター」を、公園に集まってやっている。YouTubeもよく見る。インドア派の次男は、レゴや塗り絵などに没頭して、ひとりで遊んでいることが多い。

音楽家の長男（9歳）
次男（4歳）

家の近くを通る阪急電車に3歳からハマって、YouTubeの定点カメラ映像などもよく見ている。電車図鑑もボロボロに。テレビではなぜかニュースが好きで、まづNHK。

シユーズデザイナーの息子（5歳）



INTERVIEW

yumi miyahara

日本科学未来館 宮原裕美さん、 子どもの創造教育について どんなトライをしていますか？

KIITOが2年に1度開催するワークショップ「ちびっこくべ」は、子どもたちが「想像力」と「創造力」を育む学びの場となっています。そこで、KIITOスタッフがぜひ参考にしたいと声をかけたのが、日本科学未来館の宮原裕美さん。宮原さんは、10~20代の若い世代によるアイデアを研究者、クリエイターと形にする「未来館ビジョナリーキャンプ」、親子向けの体験展示「おや?っこひろば」など、気になる教育普及プログラムを次々と手がけています。



宮原裕美

日本科学未来館 展示企画開発課マネージャー。千葉大学大学院で美術教育課程修了後、秋吉台国際芸術村、九州国立博物館等を経て2008年から現職。科学技術や芸術も含めた文化活動を、社会や教育との関わりの中で実践すべく、若い世代が科学者やクリエイターと一緒に展示をつくるプロジェクトなどを手がけている。

○1 小笠原舞 保育士起業家

数多くの「違い」に触れたこと

4人の大人の子ども時代。

さまざまな分野で活躍する4人に子どもの頃の学びを振り返っていただきました。そこに大人になってしまった今に通じるもの何かあるのでしょうか。

長田区在住、2歳児ママ。保育士経験を生かし、子どもがその子らしく育てる社会づくりをしている。合同会社こどもみらい探求社 共同代表。

大阪生まれ。設計事務所を経て「魅力的な場所づくり・人が集う仕組みづくり・食で人と場所を繋ぐ活動」を国内外で行う。2017年に風土を体験するレストラン「山のテーブル」をオープン。料理家、ピクニックコーディネーター。

— 宮原さんはどんな子ども時代を過ごしましたか。

ありきたりですけど、読書がすごく好きでした。なかでもファンタジーが好きで、「メアリー・ポピンズ」「クレヨン王国」シリーズなどをよく読んでましたね。メアリー・ポピンズのように傘を広げてフワフワと浮けないか実際に階段でやってみてケガしたり(笑)。自分で何かを試しにやってみると気が済まない子どもでした。学校教育への疑問というものは特になくて、ふつうに受験勉強もがんばっていました。

— 教育普及の仕事につながるような学びといえば、どんなことが思い当たりますか。

大学で美術史を専攻して、ニューヨークに留学してマルセル・デュシャンの研究をしていたのですが、学芸員としての実習先が福岡アジア美術館でした。そこで出会った学芸員さんから、知識を試すようアートを見るのではなく、作品と批評的に対峙することが大事だと教わりました。しかも、滞在していたシンガポールのアーティストと話をすれば、私は日本に占領されたシンガポールの歴史が、個人レベルでは言語統制まで及ぶことなど全然知らなかったと気づかされて。美術と歴史は密接に結びついてるのに、私はただの知識としてそれぞれを学んでただけで、そのつながりも意味も見出だせてなかったんです。

— そうした気づきは、日本科学未来館での活動にも生きていますか。

そうですね。2014年にオープンした未来館の「おやっ?こひろば」は、小さな子どもが「おやっ?」と不思議に思う気持ちを親がきちんと見守ったり、いっしょにその疑問を深めていくようにとつくった常設展示です。その監修を、当時、NHKの科学教育番組『考えるカラス』にも関わっておられた京都大学総合博物館の塩瀬隆之先生にお願いしました。『考えるカラス』もそうでしたけど、塩瀬さんは正しい答えを出す必要はない、問う姿勢こそがとても大事だって言うんですね。未来館の親子ワークショップとして、お盆の上に風船を乗せて落とすとどうなるかという実験をしたことあります。やってみるとお盆と風船が同じスピードで落ちるんですけど、その理屈は京大生でも簡単には答えられないそなんです。その理由を親子で一緒に考えました。渡すべきは答えではなく、問いなんです。

— 「おやっ?こひろば」などでむずかしいなと思うことは何でしょう。

やっぱり子どもは、大人がデザインしたとおりには絶対に動かない。想定の斜め上を超えてくるからすばらしいのだけど、安全上の問題が出てきたら、どうしても子どものクリエイティビティを我慢してもらわなければいけなくて。その解決策はなかなか見当たらないですね。

— KIITOで開催している「ちびっこくべ」でもそうなんですが、子どものモチベーションをいかに引き出して、持続させるかがむずかしいことだと感じています。

子どもの「おや?」「なんで?」を引き出すのが第一ですが、それが子どもから出てきたときに大人がどう対応するか、その準備ができるかが重要だと思います。答えをすぐに出すのではなく、言葉を補足しながら一緒に不思議を探求していくかどうか。それから、子どもに自分自身でやったという感覚をいかに持つもらうか。塩瀬さんと親子のワークショップをやったときにも、「子どもは小さな研究者、親は大きな助手です」と言って、知識ある大人が無知な子どもに教えるという構図を崩したことが印象的でした。実際にそうすると、子どももやらされてる感がなくなって、積極的にいろんなことを試しはじめるとですね。

続していくような学びが理想的じゃないでしょうか。体験で終わるのではなく、子どもの経験になっていくこと。

— 最後に、ご自身の子ども時代と比べて、今の子どもたちに変化を感じることはありますか。

画一的な教育が疑問視されて、個人やそのクリエイティビティにも目が向けられるようになってきていると思います。ただ、これは未来館でもよくテーマになることですが、地球温暖化、人口問題といった地球規模の課題をどう解決していくかというところに、ひとりの専門家、ひとつの知識ではなく、太刀打ちできないんです。いろんな専門知を持ち寄って、相手の専門性や意見を聞き入れながら議論を深めていくようなこと、チームワークはこれからの世代にはますます求められるはず。

なので、子どもたちがただ情報や知識を増やすことよりも、自分を突き動かす根幹のところをきちんと認識できるようになればと思います。

※
CREATIVE WORKSHOP ちびっこくべ
2012年から4回実施してきたKIITOのワークショッププログラム。小3から中3までを対象に、シェフ・建築家・デザイナーといったプロのクリエイターとチームを組み、保護者がほぼ関わらない子どもたちだけの空間で店づくりや働く体験をする。
ちびっこくべwebサイト <http://kiito.jp/chibikkobe/>

KIITO: NEWS & TOPICS / 2020 Autumn

What's on

ミケーレ・デ・ルッキの日本初個展を開催!

旧六甲山ホテルを「六甲山サイレンスリゾート」として再生するプロジェクトの設計を担当するイタリア人建築家、ミケーレ・デ・ルッキ。1980年代にムーブメントを巻き起こした「メンフィス」の主要メンバーとして活動し、現在にいたるまで第一線で活躍する建築家による、ライフスタイルの進化や生活の変革に応える「EARTH STATIONS」を、日本で初めて紹介します。



© Giovanni Gastel

EARTH STATIONS

ミケーレ・デ・ルッキが 築くイタリアンデザイン(仮)

2020年11月21日(土)~12月13日(日)

会場:ギャラリーC、
プロジェクトスペース2Bほか
館内各所(予定)

主催:デザイン・クリエイティブセンター神戸
特別協力:八光自動車工業株式会社

協力:塩谷一級建築士事務所、他
後援:神戸市(予定)

News

もの選びの新しい視点を冊子でも。

「イスをサイズで選ぶ」という視点を提案した展覧会「イス・イズ・サイズ展」の成果冊子を発行しました。展示了9組9脚のイスを作り手の想いや使い手の声とともに紹介した。ものづくりの世界がより深くわかる1冊です。オンライントークイベントのレポートや自宅でできるイスのサイズの測り方も掲載。これからもの選びの参考にぜひご覧ください。



「イス・イズ・サイズ展 —もの選びに、新たな視点を。」

成果冊子

デザイン・編集・製作:BYTHREE inc.

発行:デザイン・クリエイティブセンター神戸

*館内にて配布、webサイトより
PDFデータをご覧いただけます。

Report

素材のうまいを、暮らしのうみに。

名古屋を拠点に活動するデザインスタジオ「Bouillon(ブイヨン)」を招き、レクチャーを開催。活動のコンセプトである「うまいのきいた暮らし」についてのお話や、作品の製作過程などをご紹介いただきました。また、会場では生活空間の中にある作品の様子を実際に目にすることができる展示コーナーも設けられ、参加者の理解を深める場になりました。



トクリエイティブレクチャー 「うまいのきいた暮らし」

2020年8月29日(土)14:00~16:00

ゲスト:服部隼弥・那須裕樹

(デザインスタジオBouillon)

モデレーター:水内智英(名古屋芸術大学)

会場:KIITOホール

主催:デザイン・クリエイティブセンター神戸

後援:ユネスコ・デザイン都市なごや

推進事業実行委員会

神戸ぐらしはじめました。

10人目

酒見亮さん

(元町映画館スタッフ、僧侶)

神戸歴:5ヵ月(取材時点)



謎のベランダのあるマンションで、ルームシェアを楽しむ新生活。

小学生で僧侶としての資格を取得したという、映画館スタッフ兼僧侶の酒見さん。大学から映画の

神戸への移住、最近増えているそうです。
神戸に越して間もないあの人、気になる質問をぶつけてみました。

魅力にハマり、元町映画館でバイトを始め、今では映写から窓口業務、広報も担当している。正スタッフとして働くことが決まったタイミングで神戸へお引越し。同時に引っ越しを考えていた友人とルームシェア生活を送っている。

「洗濯機や冷蔵庫など新生活に必要な家電・家具の大半は頂きもの、まるでわらしへ長者のようにです」と酒見さん。部屋の中央に置かれたプロジェクトとスクリーンもその一つで、ソファに寝そべればいつでも映画が見られるようにセットされている。ロックダウン中はレンタルビデオ店に通い、

1日4作品を鑑賞しインプットに励んでいたそう。そんな酒見さん、一番好きな映画は『ピンポン』、好きな監督はタルコフスキーダそうです。



イラスト:安藤友美(KITOスタッフ)

小畦雅史さんの 神戸めし

ボナルーカフェの「ボナルータコライス」



お客様と訪れるときは、座椅子席で資料を広げながらゆっくりと打ち合わせをするという小畦さん。タコライスに、店長さんおすすめのスパイスをかけて類張ります。常連というわけではないが、店長さんが覚えてくれているので来店しやすいのだそう。実は奥さまのほうがよくお店に通っていて、音楽のCDを借りていただくこともありますよ、と楽しげに教えてくれました。

ボナルーカフェ【須磨】

神戸市須磨区須磨浦通4-6-16 2F

10. 小畦雅史さん (建築士)

「KITOマルシェ2019」の会場デザインを担当。「ちびっこうべ2018」ではまちのクリエイターとして参加した。



5 問でわかる 世界のデザイン都市ガイド

デザイン都市って何? 世界の「デザイン都市」担当者に共通の質問を投げかけて解きほぐします。第17回は、バルト海の東部に位置し、1991年に独立を果たしたリトアニア第2の都市・カウナスから。

Q1「ここぞデザイン都市!」というスポット / Q2カウナスのまちを舞台にした作品のおススメ / Q3最近、一番驚いたこと / Q4ハマっていること / Q5デザインをひと言でいえば

Vol.17 リトアニア・カウナス | Kaunas

- まちの中心部に6000棟以上遺るアールデコ建築です。カウナスがリトアニアの臨時首都になった1919年から1940年に、基盤整備によってまち全体が近代化されました。当時のアールデコ様式で彩られたカウナスの中心部は、アールデコ建築の発祥の地と言えます。
- 第二次世界大戦中、カウナスの日本領事館に赴任していた杉原千畝の生涯を描いた映画『杉原千畝 シギハラチウネ(Persona Non Grata)』。ナチスによる迫害から逃れるユダヤ人のために、日本通過のビザを発行して多くの命を救った外交官の生涯を描いたチキン・グラック監督の作品です。
- 何気ない日常に起きた、太陽の周囲に光の輪ができるように見える「ハロー現象」の驚異的な美しさ。友人の優しさ。ユネスコ創造都市ネットワーク・デザイン都市のコミュニティの力。
- 夏休みの締めくくり(冗談です…笑)。「歐州文化首都2022」と「デザイン都市」としてのプロジェクトを統合し、企画から実施へと進めています。2人の素晴らしい子どもたちと共に、常に学びと成長の瞬間にいます。
- デザイン=共感。英語ではEmpathy、リトアニア語ではEmpatijaです。

○ 答えてくれた人

Jūratė Tutlytėさん

Kaunas 2022(欧洲文化首都 2022)デザインプログラムのキュレーター。カウナス市のユネスコ創造都市ネットワーク担当者。ヴィータウタス・マグヌス大学の准教授であり、芸術理論家、研究者、キュレーターです。

© Marius Plepys



今号のデザイナー | 赤山朝郎 1984年和歌山県生まれ、大阪のデザイン事務所、オフィスティに所属しているグラフィックデザイナー。 <http://www.office-t-design.co.jp>

KITO NEWSLETTER VOL.030

2020年9月発行

「KITO NEWSLETTER」は、デザイン・クリエイティブセンター神戸(KITO)が年4回発行する情報誌です。センターのコンセプトである+クリエイティブな活動を発信していきます。

発行:デザイン・クリエイティブセンター神戸

編集:竹内厚[Re:S]

デザイン・イラスト:赤山朝郎(有限会社オフィスティ)

KITO:

ACCESS

阪急・阪神神戸三宮駅、JR三ノ宮駅より
フランワードを南へ徒歩20分
国道2号線を超えた神戸税関東に向かい
神戸市営地下鉄海岸線三宮・花時計前駅より徒歩10分
ポートライナー貿易センター駅より徒歩10分
※駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。

CONTACT

デザイン・クリエイティブセンター神戸(KITO)
〒651-0082 兵庫県神戸市中央区小野浜町1-4
TEL: 078-325-2235
E-mail: info@kito.jp
開館時間: 9:00~21:00
休館日: 月曜日(祝日、振替休日の場合はその翌日) 年末年始12/29-1/3
<http://kito.jp/>

